

# にーだんご



発行：くにたちの暮らしを記録する会

(佐伯安子)

「谷保の人生」

弓道をつらぬき

宮大工として

北島芳雄さん

当会代表 佐伯安子

天満宮の祭礼に大きく関わり獅子頭を練習用にと彫り、弓道を極め又、宮大工としての修業に励み、その道を極めて、人々に温かい人柄で多くの教えを与えてくれました。

大正元年十二月十八日に、下谷保の中組、北島五郎の四男として生れ、兄弟は六男六女、十二人、昔は子供は、どこでも多かったのです。それが、小さい頃に三人亡くなり、昭和六十三年頃には三人になったのです。

家は農家で、子供のころから親を助けるために畑仕事などよく手伝いました。

小学校四年の頃、初めて洋服ができて、それまではみんな着物でした。それでも買える人だけでしたが、私は買ってもらっ

てすごく嬉しかった事をおぼえています。その頃ラジオがそろそろ出て来て、自分の家にはなかったのですが、学校から先生が引率して、ラジオを聴きに府中の北多摩郡役所へ、歩きでしたが、庭に整列し、事務室の中からラッパを外に向けて聴いたのですが、調子が悪く、始めから終わりまで聴取れず「J O A K」こちらは、などと雑音ばかりで、そのところしか解からなかったことを覚えています。

小さい頃から何かを作ることが好きでした。坂下に籠屋があつて、学校の帰り道には、必ずと言っていい程、寄り道をして面白いなあーと手元をみている内に関心が深まっていったのです。家に帰ると、竹を早速切つて籠屋で見たことを思い浮かべながら、お母さんが使う小さな箆などを作っていました。最初は歪つたつたが、そのうちに親がびっくりする程うまくなっていきました。畑で使う、すくい箕とか、くず掃き籠なども作つたのです。大工は十七の時

「由大」下谷保（三家）現在は「銀大」さんに弟子入りをして、住み込みでしたが、兄弟子が二人いて、男でもお勝手から、庭掃除など、とにかく全部やりましたが、大工になる目標は「左甚五郎」のようになりたいと思つていたので。その頃は、住み込みは、家に帰れるのは、正月十五日で、やぶ入りと言つて暇が頂けるのですが、十七日の夕の仕度間に合うよう帰ることになつていたので。朝暗いうちに庭掃き、お勝手の仕事、つるべ井戸で水汲みなど、夜は道具を全部丁寧に研ぐなど仕事はきりなくありました。

昔は、よく向う飯といって職人を頼むお客さんの方で朝昼晩とご飯を出してくれることがあつたのです。最初に決めておいたのです。家を建てるのも新築だと、半年や一年以上もかかるので、そんな事もありました。親方は自転車に乗つて、小僧は道具箱を持つて歩いて行つたのです。この辺は、谷保、本宿、内藤新田などにお得意さんが多